

『日本語で「松本清張」を読む—CLILの試み—』

清水 順子

(国際教育交流センター)

キーワード

CLIL、文学、松本清張、キャリア

要旨

本稿は、北九州市立大学における短期留学生のための科目「日本語講読Ⅰ」をCLILに基づいて実践した報告である。筆者がCLILを実践するに至った経緯と、CLILのバリエーションに沿って必要な項目をどのように決定していったかを記した。実践の考察からは、日本語教師がCLILを実践するには内容の専門家との協働が欠かせず、協働を試みる行為や結果により、言語教師が受け持つ授業が変化し、可能性が広がることが示唆された。さらに、授業の成果として、学習者は自身の問題意識から興味関心を見つけ出し、学習したいことを選択できていたことが分かった。特に、清張の生き方から、その視点を自身の人生に適用し、今後のキャリアについて考えるようになっていた。

1. はじめに

CLIL¹は、発祥の地ヨーロッパでは広く定着しており、2000年代より、アジアの国々での実践が行われている。日本においても、笹島(2011)をはじめとする英語教育における報告がある。日本語教育においては、青木他(2013)から徐々に実践が広まっている²。では、CLILの教育効果はどこにあるのだろうか。現時点では、CLILは他のメソッドよりも優れているという証明はなされていない(和泉, 2012)。しかし、CLILは特定の教育方法論ではない。語学面での教育効果のみを目指しておらず、CLILの特徴である4つのC(後述)を組み合わせ

¹ CLILとは、(Content and Language Integrated Learning)の略で、内容言語統合型学習を指す。

² 筆者も、2016年に北九州市立大学における「日本事情(人文)A」科目において実践している(清水, 2016)。

ることで、「21 世紀型の学力」向上を目指す。日本の大学においては、文部科学省の答申で「学士力」とは、単なる知識の理解と習得だけではなく、汎用的技能(コミュニケーションスキル・数量的スキル・問題解決能力等)や、態度・志向性(自己管理能力・チームワーク・倫理観・社会的責任感)であるとし、総合的な学習経験と創造的思考力及び「より良く生きるために何ができるようになるか」が重視した授業が求められている。であるならば、留学生を対象とした科目でも、目標言語を通して上記のような能力向上を目指すことが必要となるだろう。以下、実践の概要を記す。

2. 本実践の概要

2. 1. 実践の経緯

まず本実践の経緯について述べる。実践の場となったのは、北九州市立大学における短期留学生のための開講科目『日本語講読 I』である。この科目は従来、他の非常勤教員が担当していたが、2023 年度は筆者が担当することになった。担当することが決定したのは 2023 年の 3 月であり、急ぎシラバスを考える必要があった。講読という科目の性質上、何かを「読む」ことに焦点が当たる。担当する上で専任教員と相談したのは、以下の 2 点である。①何を読むか、②どのように授業を行うか、である。

①に関しては、松本清張作品にした。そのきっかけとなったのは、筆者が科目を担当する直前の 2023 年冬、専任教員が松本清張記念館の館長と会ったことである。松本清張記念館を訪れ、館長に案内していただく中で何らかの連携ができる可能性が生まれていた。元々、松本清張は北九州ゆかりの文学作家であり、北九州や九州を題材にした清張作品は、学習者にとっても読みやすいものであった。さらに、筆者は大学時代に近代文学ゼミに所属しており、当時の指導教官は松本清張を研究していた。このような出会いと不思議な縁が重なり、自然と清張作品を扱うことに決定した。次に、②どのように授業を行うか、である。授業の方法としては、CLIL に基づくことにした。CLIL については次節に述べる。

2. 2. CLIL とは何か

CLIL とは、Content and Language Integrated Learning の略で、内容言語統合型学習のことである。教科科目やテーマの内容の学習と外国語の学習を組み合わせた言語習得アプローチを指す。この学習方法では、教科内容と言語運用能力の両方を統合させながら学ぶことができ、のみならず、バランスのとれた多様な学習活動を行わせることができる。

また、和泉他(2012)では、「CLIL が最終的に目指すのは、つまるところ 21 世紀を生き抜く地球市民の育成である」とされている。以上から、CLIL に基づく授業を行うことが適していると判断した。

2. 3 CLIL のバリエーション

では、CLIL の取入れ方は一つなのだろうか。渡部他(2011)では「教育現場の実情に合わせてさまざまなバリエーションがあってよい」とされ、目的や頻度・回数、比率、使用言語によるバリエーションがあるという。バリエーションを以下に示す(表 1)。

表 1 CLIL のバリエーション

弱形 CLIL (Weak CLIL)		強形 CLIL (Strong CLIL)
Soft CLIL (日本語教育)	目的	Hard CLIL (科目教育)
Light CLIL (単発的/小数回)	頻度・回数	Heavy CLIL (定期的/多数回)
Partial CLIL (授業の一部)	比率	Total CLIL (授業の全部)
Bilingual CLIL	使用言語	Monolingual CLIL
第一言語(英語)/日本語		日本語

(渡部他, 2011)から筆者による一部改変

表 1 から分かる通り、CLIL にはその使い方によって、弱形 CLIL(Weak CLIL)と強形 CLIL(Strong CLIL)形式がある。この 2 つは対立するものではなく、様々な CLIL が連続体のどこに位置付けられるかを示す物差しである(渡部, 2011)。

この分類は CLIL に基づいた実践研究の中ではどのように捉えられているのだろうか。高橋(2023)では、一般教養科目の科学英語という位置づけから、Soft CLIL がふさわしいと結論づけ採用している。一方、青木他(2013)では、文学部で開講した夏季集中プログラムにおいて CLIL を実践している。論文中に明言されているわけではないが、このプログラムが、日本のアートについて学ぶと同時に、日本語の語彙と聴解、会話の能力を延ばすことを目的としデザインされていることから、Hard CLIL だと判断した。教員も一人ではなく、

日本語の非常勤教員及び演劇学、芸術学を専門とするティーチングアシスタントと複数で担当している(青木他, 前掲)。

本実践では如何なるバリエーションが可能かという点、まず、日本語教師である筆者にとって、CLIL を実践する上で、他の教師との協働は欠かせない。専任教員への協力依頼や、内容の専門家との可能な連携を踏まえ、Hard CLIL が実行できそうだと判断した。次節にその判断に至った理由を述べる。

2. 4. Hard CLIL

前節では CLIL のバリエーションについて考察した。その結果、本実践では、表 1 の右側にある強形 CLIL (Strong CLIL) の中にある Hard CLIL を採用した。

青木他(前掲)では、「CLIL は一人では絶対にできない」とある。授業の一部を行う Soft CLIL とは異なり、Hard CLIL はより内容(Content)の面で、他分野の専門家との連携が必要であろう。さらに、非常勤講師として、担当授業の中で CLIL を推し進めることは、専任の教員との相談や連携も必須である。幸いなことに、本実践のきっかけとなった専任教員にも CLIL 実践の経験があり(青木他前掲)、支援が得られ、いつでも相談しようと思えばできる環境だった。つまり、CLIL を進めていく際に不安を抱いたり疑問を持ったりすることがあっても相談すれば大丈夫だと考えた。また、内容(Content)専門家としては、2.1 経緯で述べた通り、松本清張記念館の館長と、筆者の大学時代のゼミの指導教員(近代文学専門)に相談ができそうだと考えた。さらに、筆者は以前にも北九大における日本事情科目で CLIL を取り入れた経験がある(清水, 2016)。以上を総合すると、Hard CLIL に対する抵抗は少なかったし、やってみたいという気持ちを大きく持つようになった。

これで、②方法が決定した。内容を学習するために(Hard CLIL)、専用のシラバスに沿って(Heavy CLIL)、授業のすべて(Total CLIL)で、日本語のみで学ぶ(Monolingual CLIL)形式である。強形 CLIL の実践として、先に述べた青木他(前掲)のデザインを参考にした。

3. 北九州市立大学における「日本語講読 I」科目

3. 1. 科目の位置づけ

まず、科目の位置づけについて記す。短期留学生のために国際教育交流センターが提供する科目は、日本語のレベルに合わせて初級(N4~)中級(N3~)中上級(N2~)クラス分けがなされており、文法や、語彙、漢字を学ぶ。そのような中であって、「日本語講読 I」は、日本語の授業とはやや異なる位置にある。異なるというのは、日本語よりも内容に重きを

置く科目とされている点だ。さらに、日本語科目はクラス分けがなされているが、「日本語講読Ⅰ」は、留学生の日本語レベルの中で上位3クラスが履修する。2単位の授業で、週に一回90分あり、1学期を通して15回の授業と、最終試験日(90分)がある。

3. 2. 学習者と特徴

次に学習者について説明する。2023年度1学期に開講した「日本語講読Ⅰ」の学習者は、協定校からの短期留学生(N2～N3後半レベル)17名だった。学生の出身は、韓国、台湾、カンボジア、タイ、イギリス、オーストラリアであり、韓国出身の学生が5名と最も多かった。

全体の特徴としては、授業初回は、学生の雰囲気は明るく、活発な話し合い活動が期待できそうな印象を持った。学習者の半数は前学期から引き続き留学生している学習者であり、ある程度の人間関係の形成もできていた。読むことに関する初回アンケート(2023年4月10日)からは、「文学作品や本を読むこと」が好きだと答えた学生は全体の2割程度(17人中3人)、あまり読んでこなかった、ほとんど読まないという学生は8割(17人中14人)だった。このアンケートの結果から、従来の読解の授業をやっても上手くいかないだろうことが容易に予想できたとし、やはりCLILでやるべきだという思いを新たにした。

3. 3 授業の目的

「日本語講読Ⅰ」の目的は、日本語で日本の文学作品を読むことにある。主たる題材として、北九州ゆかりの作家でもある松本清張の作品を取りあげた。清張作品は社会派推理小説としても知られている。昭和の時代背景や社会的な価値観を作品から読み解くことを期待した。以上を踏まえて、『日本語講読Ⅰ』の授業目標を、以下に設定した。

1. 昭和の時代背景を知ると共に、作品に描かれる権力・貧困・差別・格差などの社会問題を理解する。
2. 社会問題が現代日本のみならず、世界にとっても共通であることを知る。
3. 生涯現役の作家清張の人生から、自身のキャリアについて考える。

学習者に対しては、授業の初回で、松本清張作品を読むこと、授業の方法としてはCLILに基づくこと、CLIL言語として日本語を使用することを伝えた。松本清張文学には、人間心理(差別・欲・嫉妬)が現れるのが常であり、それはいつの時代も変わらない不変的なものであるならば、文学作品を読むことは、現代日本を読み解くきっかけになると考える。

3. 4 CLIL のシラバス

CLIL には、4つのC(内容 Content、言語 Communication、思考 Cognition、協学・文化 Community/Culture)がある。CLIL では、この4つのCを有機的に融合させる点が大きな特徴であり教育効果となる。最初の推進力となるのは内容(Content)であり、それに、言語(Communication)、思考(Cognition)、協学(Community)を絡ませていく(渡辺他, 2011)。以下に「日本語講読 I」の CLIL シラバスを示す。

表2 「日本語講読 I」の CLIL シラバス

授業回	内容 (Content)	言語 (Communication)	思考 (Cognition)	協学・文化 (Community/Culture)
1回	文学作品と私	文学作品と作家について自分の知っていることをまとめ伝える。	作家(作品)と自身との関りについて考える。 分析	個人 ペア(共有)
2回	清張と北九州市(1)	新出単語 図表の読み取り	理解	個人 グループ
3回	清張と旅	新出単語 地図の読み取り	理解・適用・分析	個人 グループ
4回	清張と北九州市(2)	重要文法 重要単語 書き言葉の特徴	昭和時代の北九州を理解する。 適用	個人 ペア
5回 6回	映画「砂の器」	新出単語 聴き取り 映像の読み取り	作品の映像化を比較する。映画に現れる昭和時代の特徴について考える。	個人 グループ
7回 8回	小説「砂の器」	重要文法 話の構成に注意を払った読み取り	展開を予想する。 理解・分析・比較	個人 ペア
9回	評論番組「砂の器」	既出単語 聴き取り	分析 評価	個人 ペア

		映像作品と小説との比較	比較	
10回	小説「砂の器」	自身の解釈を話す。 ディスカッションする。	創造(予想) 分析	個人(書く) グループ(議論)
11回 12回 13回	探索型学習	松本清張について、 興味が持てるところ を調べる。	理解 分析 創造	個人 ペア グループ
14回	ポスターセッション	他のグループのポスターをみて、質問し、 意見を交換する。	理解・創造・評価	セッション(グループ 毎にプレゼン)
15回	清張のキャリアと清張作品のオマージュ	キャリアを概観し、 現代のキャリア教育 と比較する。 清張作品が与えた影 響について考える。	比較 分析 創造	個人 ペア
試験 日	学んだことを振り返る		評価	グループ 個人

4. 考察

4. 1. CLIL 実践の評価

ここでは、CLIL 実践の評価を CLIL の 10 大原則(池田, 2011)に照らし合わせながら考察する。

表3 CLIL の 10 大原則

<p>(1) 内容学習と語学学習の比重は 1 : 1 である。</p> <p>(2) 4 技能(読む・聞く・書く・話す)をバランスよく統合して使う。</p> <p>(3) タスクを多く与える。</p> <p>(4) さまざまなレベルの思考力(暗記、理解、適用、分析、評価、創造)を活用する。</p> <p>(5) 協同学習(ペアやグループ活動)を重視する。</p> <p>(6) 異文化理解や国際問題の要素を入れる。</p>
--

- (7) オーセンティック素材(新聞、雑誌、ウェブサイトなど)の使用を奨励する。
- (8) 文字だけでなく、音声、数字、視覚(図版や映像)による情報を与える。
- (9) 内容と言語の両面での足場(学習の手助け)を用意する。
- (10) 学習スキルの指導を行う。

池田(2011)より、一部筆者改変

(1) 内容学習と語学学習の比重は1 : 1である。

清張作品について学ぶことと日本語学習の比重はほぼ1 : 1であったと思う。もしかすると内容に偏りすぎる回もあったかもしれないが、学習者が提出したワークシートは、文法面でもフィードバックを行った。日本語と同じくらい内容に関して学ぶことに学習者の抵抗はなかった。また、内容を学びやすくするために、該当箇所の翻訳版も付けた。

(2) 4 技能(読む・聞く・書く・話す)をバランスよく統合して使う。

読んだり聞いたりしたことは、毎回コメント用紙に書くか、ペアやグループで話しあったりして確認していた。しかしながら授業後半は、ポスターセッションに取り組んだため、話したり聞いたりする比重が多くなったかもしれない。また、読むことに対する苦痛を訴える学生も少なくなかった。中には、1 ページ分の場面をそのまま自身のスマホでかざして訳している学生もいた。読むためのストラテジーではあるが、それは本来の読みとは異なり、読解力の養成にはつながらないだろう。今回の実践では、語彙の手当てをした後に、スマホを使用しないというルールを定めたが、これが適切だったかどうかは不明である。「読むこと」に関して今後の課題である。

(3) タスクを多く与える。

テキストの内容理解のタスクから、創造的なタスクを、小さなものから大きなものまで思いつく限り与えた。授業外でのタスクとして、松本清張記念館へ行き、レポートを書くことも課した。清水(2016)の反省を活かし、大きなタスクは教室の外に出かけて初めて達成できるものにした。

(4) さまざまなレベルの思考力(暗記、理解、適用、分析、評価、創造)を活用する。

暗記は少なかったかもしれない。理解や、分析、評価、創造に関しては、探索学習でも活用できた。適用に関しては、文学作品から理解したことを自身の実体験や一般的な事象に捉え直す視点が不足していた。今後の課題である。

(5)協同学習(ペアやグループ活動)を重視する。

授業では、毎回活動の形態によって机を配置していた。最初は一人で思考していたものでも、共有の際には机を動かし、ペアやグループで学習した。ポスターセッションでは、3、4名のグループを構成し、テーマから議論し決定するようにした。セッションの発表でも同様にグループで行った。反面、個人でじっくりと「読む」時間を取ることが少なかった。また、「読む」速度は個人毎にかなり差があった。予習にしたり、あらかじめ授業計画の中に入れておくなどの対策が必要である。

(6)異文化理解や国際問題の要素を入れる。

清張作品には昭和の時代の特徴が色濃く表れる。特に、鉄道網や高度成長期に伴う3種の神器など、テレビでしか見たことがなかった昭和時代の風景や、昭和の歌、価値観について触れる機会となった。

また松本清張は社会派推理小説に力を入れていたため、作品には、格差や力・貧困・差別・格差などの社会問題が取り上げられている。このような問題は日本国外でも同様である。特に、『砂の器』に出てくるハンセン病を取り巻く課題は、学習者の出身国でも問題とされていた。自国での政策の違いが価値観が反映されたものだと気づき、議論が白熱した。

(7)オーセンティック素材(新聞、雑誌、ウェブサイトなど)の使用を奨励する。

オーセンティックな素材に関しては、努めて集めたつもりだが、少々不足していたかもしれない(資料1参照)。まだ探せばあると思うし、探し続ける必要があると感じている。素材を探していく過程で複数の図書館に足を運んだ。松本清張の全集は市内の図書館の至るところに置いてあり、学習者でもアクセスしやすいことが分かった。さらに、映像化作品に関しては、実践が終わった後の2024年1月にもドラマ化されているものもある。清張作品に出演することは俳優にとっては名誉なことであろうし、これからも現代風にリメイクされながら創られるのだろう。筆者にとって清張作品の面白さや奥の深さが、素材を探求するモチベーションとなったが、学習者にとってはこの幅広さが伝わっていたかは判断できなかった。しかしながら、この授業実践の後、松本清張記念館にて、「清張と北九州」という企画展があり、学生に案内したところ、行ってみた学習者もいた。他にもドラマを見たり作品を読んだり、興味を持ってくれたようである。

(8)文字だけでなく、音声、数字、視覚(図版や映像)による情報を与える。

授業では作品をするための前準備として、様々なものを取り入れた。清張作品の朗読や、図表、映像など、5感に訴える仕組みを作り、作品世界を理解しやすくした。中でも、実際に松本清張記念館を訪問できたことは大きかった。松本清張の作品のみならず、愛用の品や、仕事部屋、作品の視聴などができ、スキーマが活性化された。

(9) 内容と言語の両面での足場(学習の手助け)を用意する。

言語的な負荷の調整(青木他, 2013)を参考に、オーセンティックな教材から講義の理解に必要な背景知識と語彙・表現などを拾い出した。また、非漢字圏の学習者も多くいたため、漢字にはあらかじめルビをふっておいた。授業途中からは、授業前タスクとしてこれを課題にした。文法についても重要な文型に着目した。また当該文法が文中でどのような役割を果たしているか、作品の構成をふまえながら解説した。読む際に前提となる背景知識は説明だけではなく、図録等で視覚的に提供することを心掛けた。さらに、読んだ場面と同じ映像化場面を比較することで理解を促した。映像で表現されていること、小説で表現されていることの違いを表にした。

(10) 学習スキルの指導を行う。

和泉(2012)では、学習スキルに関する省察のチェックポイントとして、「ノートを取り方などの学習スキルの指導はあるか？」が挙げられている。授業では、講演などの長いひとまとまりの話しを聞く際にメモから、ノートにまとめるという練習も行った。また、読むだけではなく、聞くことも重視した。しかし映像化作品や録音された解説を「聴く」際には、全てを理解できなくても良いとし、理解が進むように話の筋を書き添えたワークシートを使用した。

4. 2. 授業の成果

ここでは、授業の成果を当初の授業目標を基にまとめる。授業目標を再度記す。

1. 昭和の時代背景を知ると共に、作品に描かれる権力・貧困・差別・格差などの社会問題を理解する。
2. 社会問題が現代日本のみならず、世界にとっても共通であることを知る。
3. 生涯現役の作家清張の人生から、自身のキャリアについて考える。

(1) ポスターセッション

授業後半では、松本清張に関する探索型学習を行った。テーマは自由で、3,4人のグルー

プでポスターを作成するというものである。全部で5つのグループが取り組み、それぞれのグループは、お互い重複することなく独自のテーマを設定することができた。

- ポスター1 「松本清張からキャリアを考える」
- ポスター2 「地図から知る松本清張」
- ポスター3 「松本清張と北九州」
- ポスター4 「松本清張と昭和時代」
- ポスター5 「清張作品から見る差別構造」

このことから、清張の多面性や昭和の影響を学習者が的確に理解していたことがうかがえる。授業の目標1及び2を達成したといえる。

(2) キャリア教育

上記に加え、授業目標(3)に関連して特筆すべきは、最終的な学習者の興味関心の多くが清張自身のキャリアに集約したことである。学習者が学期修了の試験日に書いた感想シートを取り上げる。

- ・ただ本を書くことじゃなくて、社会の変化をいのった彼の文学がすばらしいと思いました。
- ・作品がめっちゃ多くて、作品で皆に伝えたいことも多い。自分の仕事にめっちゃ夢中になっていた人だと思うので、私は将来仕事するときも松本清張のように自分の仕事がめっちゃ好きで頑張りたい。
- ・元々文学作品について興味を持っていなかったけど、松本清張の色々な作品を学びながら、面白い話がたくさん入っていることを知るようになりました。これから「文学を読むことに挑戦しないと」と思いました。
- ・松本清張も色々経験したから、たくさん本を書いた。そこで多様なことを経験することが大事と思いました。いろんな人と会って、いろんなことを挑戦して、目を広げたくくなりました。
- ・彼の人生を学べて、自分にもモチベーションをもらいました。
- ・40前はずっと他の仕事やってたから、面白いキャリアの人。私も松本清張みたいな人になりたいんです！
- ・清張の生涯は最初はそんな順調ではなかったけど、それが分かって、自分が頑張らな

い理由がないでしょうと思います。自分が好きな仕事をやって、この社会いい影響になりたい、少しだけでも大丈夫。清張と同じ一生懸命に生きたい。

・自分は興味を持つこと、初めるは遅くてもいい。人生が終わる前に何かを残せばいいと思います。

(2023年8月7日感想シート)

このように、多くの学習者が最後に記したのは、松本清張作品そのものではなく、作品の全体から読み取った清張の人生(キャリア)だった。この背景には、学期修了後に、17名の学習者のうち、15名が留学生生活を終えて帰国する予定があったことが考えられる。授業が進み、帰国が近づくにつれ、今後のことを現実問題として考えるようになったと推察する。学習者は清張の人生を通して生き方を学び、自身の人生でどのように適用し生きていくかを考えていた。

5. おわりに

以上、日本語講読科目で CLIL を試みた報告とする。CLIL を行う際には常に内容(Content)面での充実や連携が気にかかる(清水, 2016)。青木他(2013)は、日本語教育における CLIL 実践の限界について、「日本語教育が CLIL を取り入れようとする時、最大のハードルとなるのは、CLIL は日本語教師だけではできないという制約」と述べている。そして同時に、その可能性について、「ハードルを乗り越える過程は、孤立しがちな日本語教師が他の分野と連携していくための絶好の機会にもなりうる」としている。CLIL は日本語教師だけではできないが、運よく内容の専門家との緊密な連携が取れたとしても、日本語教師にも内容に関する理解は必要だろう。今回の実践で、内容(松本清張)について考え準備することは、筆者にとってはこれまで学びを活かすようで感慨深かったし、自分自身が教師として過去から現在へと連続しているように感じられた。その気持ちが授業の可能性を広げることができたように思う。日本語教師も言語のみならず、内容に関する好奇心や眼差しを持ち、一番の学習者となって専門家と協働していくことの重要性を感じている。

参考文献

青木直子・脇坂真彩子・小林浩明(2013)「日本語教育と芸術学のコラボレーション：大阪大学文学部における CLIL の試み」『第二言語としての日本語の習得研究』第二言語習得

研究会 編 (16)pp. 91-106

池田真(2011)「CLIL と英文法指導：内容学習と言語学習の統合」『英語教育』第 60 巻第 7 号 pp. 34-37

和泉伸一・池田真・渡部良典 (2012)『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦第 2 巻実践と応用』上智大学出版

清水順子(2016)「CLIL 理論に基づいた「日本事情」の可能性-伝統文化から現代日本を理解する試み」『北九州市立大学国際論集』(14)pp. 147-155

原華耶(2021)「日本語教育における CLIL に関する研究の動向」『東亜大学紀要』第 33 号 pp. 117-121

笹島茂 (2011)『CLIL 新しい発想の授業』三修社

高橋強(2023)「CLIL 教育における一考察:SDGs の観点から」『異文化の諸相』43(1)pp. 87-107

内藤徹 (2015)「CLIL を利用した英語教育」『仁愛女子短期大学研究紀要』第 47 号 pp. 7-15

深川美帆 (2019)「CLIL を取り入れた日本語授業における学習者の学びについての一考察」『第 5 回スペイン日本語教師会シンポジウム発表論文集』 pp. 101-106

元木佳江 (2020)「留学生に対する「日本文化・日本事情」の授業設計—CLIL (内容言語統合型学習) の視点から考える—」『語文と教育』第 34 巻 pp. 92-103

渡部良典・池田真・和泉伸一 (2011)『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦第 1 巻原理と方法』上智大学出版

『文部科学省新学習指導要領 生きる力』(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm 2024 年 2 月 28 日アクセス)

『「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申の概要』(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryu/attach/1247211.htm 2024 年 2 月 28 日アクセス)

参考資料 授業で使用したオーセンティックな素材

1. 音声資料

『今日の焦点北九州 松本清張記念館』 <https://www.youtube.com/watch?v=EmY-UwHerYI> (2024 年 2 月 25 日アクセス)

映画『砂の器リマスター版』東映

NHK100分で名著『砂の器』

『松本清張朗読劇シリーズ』前進座公演北九州市立松本清張記念館プロデュース

『松本清張「砂の器」国際シンポジウム(研究会・第45回研究発表会)』録画

2. 松本清張記念館企画展示資料

松本清張記念館 VR 展示

松本清張記念館企画展示

3. 文字情報

『桜舞う中清張作品朗読』西日本新聞記事 2023年4月4日朝刊・小説『砂の器』上下巻
小説『「或る小倉日記」伝』

小説『時間の習俗』

松本清張記念館官報

北九州市政だより

『人生100年時代～松本清張さんに学ぶ!～』松本清張記念館館長古賀厚志

『地図で読む松本清張』北川清著、帝国書院編集部

『文豪ナビ』新潮文庫

『清張地獄八景』みうらじゅん著

『「松本清張」で読む昭和史』原武史著

『松本清張傑作短編コレクション上』宮部みゆき責任編集

『松本清張没後10年特別企画展図録「松本清張の度」』松本清張記念館

謝辞

本実践を行うにあたり、多くの方にご協力をいただきました。この場をお借りして御礼を申し上げます。まず、松本清張記念館の古賀厚志さんには、ポスターセッションにおいてくださって学習者に温かい励ましのお言葉とご感想をくださいました。また、小林浩明先生には、松本清張記念館と縁を取り持っていただいた上、Hard CLIL の経験者として、明示的/非明示的にご助言をいただき、深く感謝しております。先生が薦めてくださらなかったら思い切ってしまうことはできなかったと思います。最後に、学部時代にご指導いただいた松本常彦先生には、この実践がきっかけで参加した研究会で久しぶりにお目にかかり、清張作品について新たな解釈と示唆を与えていただきました。これらのことは、CLIL を実践する上で大変貴重な経験として私の中に残っています。また、教室の内外との協働の大切さ、有用性を感じることができました。本当にありがとうございました。